



医学教育シリーズ

2023年度近畿大学医学部タイ研修プログラムに参加して

井上 綺 巳¹ 二階堂 綾音²

¹近畿大学医学部医学科5学年

²近畿大学医学部医学科4学年

はじめに

私たちは3月10日から3月23日までタイのチュラロンコン大学の海外研修に参加し、呼吸器内科学を学んできました。海外研修で異文化や海外の医療環境に触れて、さらに成長する機会を提供してくれます。

このレポートでは、タイの国についてや大学の研修内容、そして得られた経験や成果について述べたいと思います。

研修について

実習は毎朝7時30分のICUカンファレンスから始まります。終了時間は夕方5時頃でした。カンファレンスは英語で行われます。会話の中で、たまにタイ語が混じるときもありましたが、その時は近くの先生が英訳してくださいました。さらに、私たちが英語がわからないでいるとスペルを見せてくれたり、簡単な英語で説明をしてくれるなど、私たちが理解できるよう丁寧に教えてくださいました。

カンファレンス後のプログラムは、日替わりです。

【1日目】カンファレンスの後、午前は呼吸器病棟の回診の様子を見学、お昼はランチを食べながら研修医との勉強会に参加、午後は実習の指導医の専門である睡眠外来を見学しました。

【2日目】午前は専攻医との勉強会に参加し、研修医と一緒にレントゲン読影、午後は薬剤師によるネブライザーの説明会に参加、その後、留学生交流会、回診をして終了しました。

【3日目】午前中は呼吸器の一般外来の見学、午後はカンファレンスと回診をしました。

【4日目と5日目】喘息の学会に参加。学会はタイ語

でしたが、スライドが英語でしたので、何とか理解できました。なお、学会のランチミーティングやビュッフェ形式のホテルのご飯など、勉強以外でもとても楽しかったです。

【6日目と7日目】は大学が休みで、観光して余暇を楽しみました。

【8日目】午前は病院内の学会に参加し、結核の抗生剤について学び、お昼は1日目と同様に研修医との勉強会に参加、午後は睡眠外来の見学、5時からの放課後はタイ語のレッスンを受けました。

【9日目】午前は専攻医の勉強会、インドネシアから来た先生の教育講座、病棟カンファレンス、午後は回診の後、人工呼吸器についての講義をうけました。

【10日目】病院設立者に対して行われるVIP外来と一般外来の見学、お昼の研修医の勉強会の後、午後は病棟カンファレンスに参加しました。

【11日目】の最終日は、グランドカンファレンスと呼ばれる、様々な職種のスタッフが集まって開かれるカンファレンスに参加し、その後専攻医の勉強会に参加、午後は気管支鏡検査を見学しました。

以上が実習内容です。

毎日朝のカンファレンスに始まり夕方の5時まで、お昼の勉強会を含めて密度の高い内容でした。特に外来では医師が患者さん一人一人に時間をかけて診察されていたのが印象的で、言葉はわからないものの患者さんとの信頼関係が感じ取られました。さらに学会の参加など貴重な体験をすることもできました。

チュラロンコン大学の先生方はみなさん暖かく、困っていると授業以外でもいろいろ教えてくださいました。また、授業の合間に図書館も訪れましたが、たくさんの学生が勉強されていました。大変そうでしたが、生き生きとされていました。

勉強することの楽しさをあらためて認識する機会となり、非常に有意義な2週間でした。

総 括

放課後・休日

1週目の放課後は、バンコク市内の有名なショッピングモールで買い物をしたり、市場やナイトマーケットに行ったりして現地の雰囲気を楽しみました。土曜日はバンコクの有名な三大寺院に行き、寺院を観光している時に現地で働いている日本人に出会い、途中まで一緒に観光を行いました。日曜日はバンコクから車で1時間半ほどのアユタヤに、ツアーで観光に行きました。アユタヤは約37度ととても暑かったですが、遺跡などの観光名所を回れていい思い出になりました。2週目の放課後は、チュラロンコン大学で留学しているマレーシアのお医者さんや、観光の時に会った日本人の方とタイ料理を食べに行きました。マレーシア人との交流を持ったことで、タイだけでなくマレーシアの医療の現状や文化にもついて学ぶことができました。また、現地に住んでいる日本人からタイでの生活について話を聞くことができ、実際にタイの病院に行った時の日本との医療の違いを教えてくださいました。学校以外でも、英語を用いたコミュニケーションやタイの文化等を色々知ることができてとてもいい経験になりました。

チュラロンコン大学で学ばせていただいた2週間は充実していて、とても貴重な経験になりました。バンコクなどのタイの都市部での医療は日本と同程度ぐらいに発展していますが、都市部を離れた場所では医師不足が日本以上に深刻だと聞きました。そのため日本と違い、タイの医学部は日本と同じで6年制課程であるにもかかわらず、学生のうちから患者の問診や診察を行ったり、当直といった夜遅くまでの実習がありました。卒業して研修医に上がると、即戦力の1人で働ける一人前の医師として活躍していることに日本との違いを感じました。また、タイの医師や学生は皆英語がとても堪能であり、タイ語と英語を交えてスタッフ同士でコミュニケーションを行っていることに驚きました。日本では医学は日本語で行なっているために、タイでの医療現場での見学はとても新鮮であり、自分の世界に対する視野が広がりました。

最後に、この研修に参加させて頂いた大学、そして2週間海外研修を受け入れてくださったチュラロンコン大学に感謝申し上げます。英語の必要性を改めて実感し、この研修で学んだことを活かして、今後ますます医学と英語の勉強に励んで行こうと考えています。この研修で自身の価値観を広げることができ、貴重な体験をさせていただき本当にありがとうございました。



指導医の Naricha 先生と研修医の先生と CT 画像の読影

医学教育シリーズ

2023年度近畿大学医学部ベトナム研修プログラムに参加して

原 理 紗¹ 寺 田 友 香²

¹近畿大学医学部医学科5学年

²近畿大学医学部医学科4学年

1. はじめに

2024/3/10～2024/3/23の期間で海外研修プログラムに参加し、私たちはベトナムのホーチミンにある小児病院と産婦人科病院で研修を行った。研修はVietnam National Universityの5年生が行っている臨床実習に参加し、病院実習以外の時間はホーチミンの散策を行った。病院をはじめとして市内散策においても文化や国民性など様々な点において日本と大きく異なることが大きく刺激的な2週間を過ごすことができた。そこででの経験や感じたことを以下に記す。

2. 研修について

3/14～3/19はChildren Hospital1で研修を行った。病院に到着すると驚きの連続であった。まず一番に驚いたのは人の多さである。とても広い敷地に大きな病棟がいくつかあり、その病棟内の廊下では子供やその家族がひしめき合い、一つの病室内には10を超えるベッドが所狭く並んでいた。そして敷地内には遊園地や公園にあるような遊具があり子供たちが自由に遊んでいた。日本と違う景色がひろがっており、これからどのような経験ができるのかと胸を躍らせながら実習を開始した。小児病院では感染症と血液内科を中心に見学させていただいた。感染症では髄膜炎や手足口病を、血液内科ではITP、サラセミアの患者を診た。学生は一人当たり3～5人の患者が割り当てられており、その患者の入院後経過や病棟での診察を行っていた。そして症例に関して班員と先生に症例検討会という形で症例を共有していた。この実習形態は我々の実習と似ているが大きく違ったことは生徒の患者へのかかわり方である。生徒はまず朝一番に担当患者の状態を確

認しにいき、また日中も病室に訪問し積極的にコミュニケーションをとり、診察をしていた。患者について深く理解しており、私たちにも非常に熱心に説明してくれた。学生という立場にとどまらずチーム医療の一部となっている印象であった。

残りの日程は産婦人科病院での研修であった。こちらは政府の許可が下りずに実習内容が縮小されてしまい非常に残念であったが病院内の様々な施設や部門を見学させていただいた。外来では1つの机で2人の患者の問診をしたり、診察室では処置が終わるとすぐに次の患者が入って来たりしていて、プライバシーの観点で国民性の違いを感じた。そして産



廊下で行われる問診

婦人科病院での実習の中で特に有意義な時間であったのは中絶に関するディスカッションとジャーナルクラブである。中絶のディスカッションでは実際の症例をもとに制度や教育の在り方にフォーカスされた内容であり、私たちは日本ででの状況を説明したり、自分の意見を述べたりした。しかし日本の制度について詳しく知らず自分の知識の少なさを痛感し、意見を述べる際に英語能力の不十分さを痛感した。またジャーナルクラブではHPV ワクチンと子宮頸がんの関係についての論文を取り扱い、各セッションに生徒が割り当てられ、論文をまとめてパワーポイントを作成し発表するという内容であった。私たちがパワーポイントを作成して発表を行った。発表後は先生の質問をもとにしてディスカッションを行ったのだが、医学論文を読みながらおらず、なぜこの論文はコホート研究を用いているのか、やグラフや研究結果の読み取り方などについての問いに苦戦した。

3. 放課後・休日

放課後は主にその日に習った内容の復習や次の日の予習に充てた。学習した疾患の日本での発生状況や治療法を調べて比較したり、ベトナムではどのよ



学生とのランチ会



journal club での発表

うな特徴や問題点があるのかを考えたりした。その結果、疾患についてより深く学ぶことができ、次の日の実習に活かすことが出来た。また新たな診療科を見学する前日は、その診療科に関する英単語を事前に学習したり、ベトナムで流行っている疾患について調べたりした。予習をしておく、先生や学生の話が理解しやすく、そのことはとても役に立った。そして、(2)に述べた産婦人科実習でのジャーナルクラブに参加するために、英語の論文を読んで、スライドを作る課題にも取り組んだ。初めてのことで戸惑ったが、メンバーとともに頑張り、とても良いスライドが完成して自信に繋がった。さらに、放課後に時間がある時は戦争証跡博物館に行ってベトナム戦争について学んだり、散歩をしてホーチミンの街並みを楽しんだりした。戦争証跡博物館では、実際にホルマリン漬けにされた奇形児や奇形児の写真を見て、大量に撒かれた枯葉剤の悲惨さを目の当たりにした。

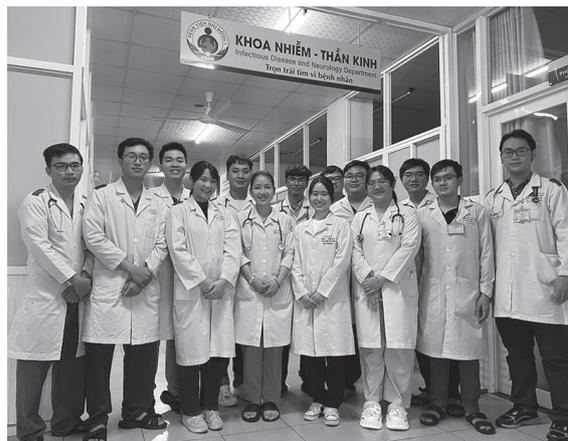
休日はメコン川クルーズに参加した。東南アジア最長のメコン川で日本では体験できない豊かな自然を存分に感じた。メコンデルタに浮かぶ島々では、ココナッツキャンディー工場やはちみつ農園などを見学し、南国の豊かな自然と文化を感じた。

4. 総 括

2週間という短期間の研修であったが、日本では経験できないことをたくさん経験できた。以上に挙げたように日本とベトナムでは医療提供体制や病院のシステム、環境が全く異なり、日本の医師は、それに比べるととても快適な環境で働くことができていると感じた。それに感謝して実習をしたり、働いたりしなければならない。また、(2)でも述べたがベトナムでは医学生も医師と同じように働いている。私は自大学の実習では指示されたことを行って満足していることが多くなっており、今回出会ったベトナムの学生のようにもっと熱心に取り組まなければならないと感じた。そして身近な学生だけを見て満足するのではなく、視野を広げて海外の学生にも負けぬように努力したいという気持ちが強くなった。学生のうちから、このような熱心な姿勢を身につけておくことは、医師となった時とても役に立つと思う。またベトナムの学生や医師はベトナム語が母国語であるにも関わらず、全員が英語を流暢に話していた。医師として働く上で、英語の論文を読んだり、海外の方と英語で交流したりすることは必要不可欠である。自分の気持ちを表現するうえで英語がうまく出てこずに悔しく思う場面が多々あった。

帰国後も英語の能力ももっと向上させるため英語学習を続けようと強く思った。

以上のように、ベトナムへの海外派遣では本当に貴重な経験をすることができた。このような経験ができたのは Vietnam National University の先生と調整をしていただいた藤田先生や学務課の東さん、現地であらゆる面でサポートして教育していただいた Tuan 先生、また近くで寄り添って説明や手助けしてくれたベトナムの医学生のおかげであり、こころより感謝申し上げたい。この経験を生かして今後の日本での臨床実習に取り組み、医師となった暁にはこの経験を思い出して、自分の理想とする医師になれるよう精進したい。



感染症と一緒に学習した先生と学生